
闇夜の死霊～人形の肩越しに～

大庭園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜の死霊／人形の肩越しに／

【Nコード】

N3357C

【作者名】

大庭園

【あらすじ】

自宅で寝ていた津田隆介16歳に、黒い霧状の死霊が襲いかかる。死霊の心をのぞいて、対峙する隆介。隆介は、死霊を成仏させられるのか。

腕のいい超能力者なら「死霊」と即断できただろう。

霊能力が目覚めて間もない津田隆介16歳にも、少しずつ、状況が飲み込めてきた。

（生臭いな。女の霊か？）

午前1時32分。自宅二階の自室。

月明かりが入ってこぬよう、雨戸を閉めた。電気はすべて消した。豆電球だけつけておく、ということもしない。電球はひとつ残らず消して、部屋を完全に真っ暗にした。

そして、午前一時にベッドに入った。

30分ほどで、隆介のまぶたは重くなった。

心地よいまどろみが、意識をやわらげてゆく。夜の海水を思わせる暗闇を、隆介の意識はしんと沈んでゆく。意識はそと眠りの底についた。これから一晩、ここで体を休めることになる。そろそろ夢でも始まり、異世界を演出してくれるにちがいない。それとも、意識は眠りの底の砂をかきわけて、さらに深く沈んでゆくのだろうか。夢すらない眠りの没頭へ。

だが、五分と経たずに目が覚めた。

瞼を開けると、暗闇の向こうに、自室の天井が見えた。

部屋の空気が、しんと乱されている。部屋の中に、黒い霧状のものが、侵入している。

霧は、天井をすり抜けてやってきた。眠っていて気付かなかったようだ。隆介が目を開けたときにはすでに、霧は自分を構成するすべての要素を、部屋へ侵入させていた。

他人の家へ入ることへの躊躇や、中に住む住人への遠慮は、まるでない。自分がこの家に入り込み、人を呪うのは当然。そう言いたげだ。

霧の周囲にある空気は、冷やされると同時に、ぬるく暖められて、

横へどかされてゆく。生暖かい空気は、電気をつけていないから、という原因ではなく、別の何かによって、黒みを増している。そして、ドブ川の水流で舞うヘドロのように、寝ている隆介の上を漂う。霧はこの空気で場を埋めつくして、「ここは自分の部屋である」という隆介のよりどころを、穴だらけにしている。

隆介がくるまっている布団では、霧が発する寒気をはね返せない。霧の寒気は、布団の繊維をすり抜けて、なんら弱まることなく、隆介の体へ到達する。瞬時に皮膚は冷やされ、鳥肌が全身へ広がる。この寒気は、体温では対抗できないようだ。皮膚の下、暖かい血が流れる体までも、急速に冷やされてゆく。筋肉や脂肪、そして骨の芯まで。寒気は、隆介の体のどこへでも、意のままに侵入してくる。布団の暖かみは寒気に負けて、どこかへ消え去ってしまった。

氷山のそびえる氷の世界へ、一人取り残されたような気分になる。だが、氷の単純な冷たさとは、少しちがう。霧の寒気には、悲しさがある。それでいて、生暖かさも含んでいる。

十分に寒気を浴びせた後で、霧はふわりと乗しかかってきた。布団越しに腹の上に乗られたことになるが、重さはまったく感じない。感触がまるでない。だが同時に、鉄球のようなずしりとした重みが、腹を圧迫しているのも確かだ。実際、布団は二つの足が乗っているように、二箇所がへこんでいるではないか。

生臭い匂いが、隆介の鼻をついた。この生臭さには覚えがある。

隆介は三ヶ月前に、人生初めての恋人ができた。16歳。同い年の少女だ。付き合って一週間そこそこで、彼女とラブホテルに入った。

そこで、大きな落胆を味わった。

隆介が想像していた性体験に比べて、現実の性体験は、味気も、可愛らしさもなかった。女性の裸は、小さなものでも、すべすべしたもので、やわらかいものでもなかった。隆介は、女性の体とはつまり、男性の体に丸みを少しつけただけの肉塊だと知った。

なによりも、女性の体に触れてまっさきに得た印象　「なんて生臭いんだ」。

鼻をつく、あの生臭さ　。
その生臭さを今、この霧が発している。間違いない、女性の死霊だ。

霧の生臭さは、布団の上を這い回り、そして中へ染み込んできた。隆介の体へ到達すると、生臭さはヘドロのように湿っぽくなって、隆介の体を這いずり回った。

寒気に生臭さも加わって、隆介の精神は恐怖による沈黙から、死霊への対抗心に変容した。

このままでは、身が持たない　。
隆介は枕から頭を上げ、布団の上にいる霧を目で確認した。形は人間だ。シルエットはやわらかい。やはり、女性の霊だ　。
(やり過ぎすることはできないみたいだ)

暗闇に目が慣れるように、目は、霊を見ることにも慣れるのだろう。霧状の人間の細部が、少しずつはつきりしてくる。布団の上に女性が立っている。黒髪を後ろへ束ねて、黒いスーツを着ている。女性の二つの足の裏が、布団越しに隆介の腹部を圧迫してくる。

(今年の四月に、どこかの企業に就職した新人のOLさん?)
女性は、うなだれている。今にも涙を流して、苦労話を始めそうな雰囲気だ。

顔立ちも認識できるようになった。見れば、鼻筋はきりりと通っているし、目もきれいだ。髪の毛もしっとりとしている。この女性は十分、美人の部類に入ると思うが　。

表情から察するに、社会に適応できずに、思いつめて自殺したそんなところだろうか。自分が味わった苦しみに気づいてほしい。自分の苦労話を、誰かにトコトン聞いてほしい　女性からは、なりふりかまわず助けを求めるような、焦燥と混乱を感じる。

(僕は高校生なので、就職して働くことの辛さはわかりませんが、あなたは本当に苦しんだんですね　とても言えば良いのかな? 相

手を受け入れるようなことを言ってあげなくちゃ)

無神経な説教をすれば、悪意のこもった憑依をされるかもしれない。このような霊は、本人が納得ゆくまで、話を聞いてあげたほうがいい。朝になるまで付き添ってあげれば、悪さはせず去ってゆくだろう。この女性が思い描く理想の親になって、理想的な受け答えをしてあげればいいのだ。

女性は美人である。そして、うなだれている。この二つの事実だけを見て、美人のおかげで得をして生きてきたくせに、自分だけが不幸とうぬぼれている。甘やかされて育ったから、軟弱な心しか持てずに自殺したのだ。などと早急に分析し、言いくるめようとするのは危険だ。

心を刺激せず、苦しみに深く共感し、ともに泣いてあげよう。

(いや、待て!)

隆介が心の中で、自分に向かって叫んだ。

女性の肩越しに、もう一人、女性がいる。

前方の女性に隠れるように、肩越しからこちらをのぞいている。

前方の女性の体で自分の全身を隠し、顔の、両目から上だけを出して、こちらを見ている。

肩越しにこちらをのぞく二つの目には、自信がない。この女性が、自分の姿を見られることに、激しい抵抗を感じていることがわかる。目は、女性の持つ不安と混乱を、はつきりと示している。美人とはほど遠い容姿で生まれたのだろう。自分に自信がなく、非社交的で閉鎖的な生活サイクルを繰り返した女性であることが、容易に推察できた。

髪の毛は一部分しか見えていないが、前方の女性と同じ黒髪のようにうだ。が、束ねてはいない。そのまま垂らしている。伸ばし放題といたところだろう。この後ろの女性は、髪の毛の手入れをほとんどしたことがないと、隆介は直感した。

(後ろの女の重みなんだろうな)

腹部を圧迫してくる、ずしりとした重み。これは前方の女性のも

のではなく、後ろの女性の重みだ。体重といったものではなく、悲しさの重み。虚しさの重み。憎しみの重みなのかもしれない。

いや、それ以外の何かが、この重みを生み出している気がする

。前方の女性は差し置いて、隆介は後ろの女性を見た。注意深く、目を合わせる。女性の目つきを観察する。彼女の目つきから、その心の深遠を察すれば、重みの答えがわかるかもしれない。心の深遠を見出してしまえば、それを形にすればいい。

この目つきが語るもの

（疎外感）

隆介は察した。答えに、にじり寄った。

（途方もない疎外感。未来を想像できない疎外感。生きている間中、味わい続けることがはつきりしている、逃げようのない疎外感。希望がなく、改善も見込めない）

この女性が、悲惨な人生を送ったことが見えてきた。

最初は黒い霧として現れた。彼女は、自分が悲しい人生を送った事実を、誰かに知ってほしいと願っている。「私を見て！」と渴望しているのだ。その一方で、惨めな人生を送った自分を恥じている。「私を見ないで！」と悲鳴をあげている。

自分のことを見て欲しい。だが、直視はされたくない 彼女の葛藤が、その姿を黒い霧に変えたのだらう。

そして自分の前に、本来なるはずだった自己の姿を浮かび上げらせ、その後ろに隠れているのだ。前方の女性は幻であり、死霊ではない。死霊は後ろの女性だ。

（それならば）

隆介は、死霊と目を合わせたまま、イメージを膨らませていった（俺みたいなブ男君に慰められても、成仏できないだろうからな）自分の顔を変えてゆくイメージ。隆介の目は一重だが、これを二重に変更する。自信と誠実さを併せ持った、大きな瞳ができた。低い鼻も、高くしてゆく。西洋人を思わせる誇り高い鼻になった。たるんだ輪郭も引き締めてゆく。短い手足も、すらりと長

くする。

ギリシア彫刻を思わせる、優美なたたずまいの美男子が現れた女性には、そう見えているはずだ。

隆介は、自分の口は動かさずに、美男子に話をさせた。

「辛かったね」

話しかけられるや、女性の瞳が生き生きと輝き始めた。私はこれ wait していた　といった表情だ。

美男子は言葉を続ける。

「君は疎外されてなどいない。君は一人ぼっちじゃない。君みたいな女性がいることを、僕は知っている」

隆介は、美男子を起き上がらせた。このまま彼女を抱きしめて、暖めてあげれば成仏

「私は、お前が触れるような存在じゃない！醜い劣等種は私の視界に入るな！」

前方の女性が、顔を上げて叫んだ。

「醜い劣等種に成仏させられるぐらいなら、私は死霊としてさまよう方を選ぶ！私にもプライドがある！」

（俺がイケメン君を操ってることに気付いてる！）

期待のこもった目で美男子を見ている後方の女性とちがいで、前方の女性は、美男子を見ようとはせず、布団で寝ている隆介をにらみつけてくる。

二人のまとまりのない反応を、どう解釈すればいいのか。

死霊の瞳の輝きは、美男子に出会えて興奮している　という、単純なものなのだろうか。確かに、美男子の幻を作った途端、彼女の瞳は輝いた。だが、その輝きの奥に、星のない夜空のような、味気ない闇を感じるのだ。逆らうことをやめた闇　。悲しい人生に疲れ果て、「普通」と呼ぶものをひとつひとつ諦めてきた人間の、疲れ果てた諦めを感じるのだ。

死霊は、美男子は幻であると気付いている　。幻とわかったうえで、抱きしめてほしいと願っている。この幻に寒気を払ってもら

って、暖まって、はやく成仏してしまいたいと切望している。

死霊の瞳の輝きには、二つの意味が混ざっているのだろう。美男子に会えたという喜びの輝き。そして、美男子が幻と知りながらもはやく楽になつてしまいたいという、諦めの涙の輝き。私を受け入れてくれるのなら、幻でもいいと。

その一方で、美男子の本体は隆介である　ということに、死霊は激しい抵抗を感じているのだ。隆介はおせじにも、女性から歓迎される容姿ではない。そのため死霊は、女性としてのプライドから隆介に抱きしめられることへの抵抗を感じている。その抵抗が、前方の幻に表出しているのだ。

（それならば　）

作ったイメージを切り離す。美男子と、自分とのつながりを消してゆく。自ら思考する、単独の存在としての美男子を、そこに置く。

（このイケメン君は、僕とは無関係だよー）

独立の存在だ。自分とは何の関係もない。

美男子に抱きしめられるということが、隆介に抱きしめられるという要素を含むことはない　と、死霊を説得する。同時に、美男子を近づけてゆく。美男子は両手を広げて死霊を抱きしめようとする。

前方の女性が隆介に向かって叫ぶ。

「お前なんかに触られたくない！」

（だよねー。そりゃそうだ）

「劣等種は近寄るな！」

（近寄るのは僕じゃないよー。安心してねー）

「来るな！」

（イケメン君、頼むぞー！）

死霊を、美男子が抱きしめた。その瞬間、美男子は球体になつて膨らんだ。そして生き生きと、白く輝き始める。心臓のように脈動しながら、部屋いっぱい膨らんでゆく。寝ている隆介も球体に包まれた。とても暖かい。冷え切っていた体が、暖まってゆく。

（こんなのに抱きしめられたら、さぞ安心するだろうな）

そう思いながら、隆介は二人の女性を見た。

前方の女性は、驚いたような顔をして、呆然としている。
後ろの死霊は、目に涙を浮かべている。自分の人生に、本当に疲れていたことが見て取れる。彼女は今、ようやく成仏のときを迎え、心の安寧を手に入れたのだ。

球体は少しずつ収縮し始めて、死霊を包み込んでいった。

最後はテニスボールほどの小さな星になり、急上昇して天井を突き抜けて去った。

（終わった）

部屋は再び真っ暗になり、静まり返った。空気の乱れも、もうない。生臭さも消えて、球体の温もりだけが、隆介の肌に残っている。

（よかった、よかった。ふうー）

目を閉じて、再びまどろみの中へ沈んでゆく。

隆介は夢を見た。

自分が死霊となり、本来なるはずだった自己の幻に隠れながら、
霊能力をもつ女性の枕元へ向かう夢を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3357c/>

闇夜の死霊～人形の肩越しに～

2010年10月8日13時11分発行